

# 第7回 「日本語大賞」

わたし      つか      ことば  
テーマ「私が使いたい言葉」



一般の部   優秀賞   受賞作品

「お道よう」の言葉を使い続けたい

新潟県

中村 栄美子

「お道よう」の言葉を使い続けたい

新潟県

中村 栄美子（なかむら・えみこ）

父は職業軍人で舞鶴の軍港に勤めていましたが、終戦とともに職を失い、家族でふる里糸魚川に戻ってきました。

戻っては来たものの、仕事がなく父は家族五人の生活のために、小さな会社に勤めたのですが、半年もたない間に会社が倒産してしまいました。

「やて、どうしよう……」と思索して、父は行商の魚屋になりました。商売の元手もいらず、自転車さえあれば何とかなる、ということで魚の知識もない父は必死の思いで魚屋になったのでした。

朝早く自転車で近くの魚市場へ買い出しに行き、荷台に積んだト口箱の魚を、

「魚いらんかね。魚屋です」

と一軒、一軒、売り歩いて、仕入れた魚を売り切り、午後は五キロも離れた隣町の魚市場へ仕入れに行くと、その帰り道、

「魚いらんかね。魚屋です」

家々を回り、その日の魚はその日のうちに売り切ることになっていました。魚を保存する氷の冷蔵庫もなかったからです。

父が魚の行商を始めて、五年ほどたった頃、日頃の疲れがたまったのか、ぐずぐず寝込む日が続く、母が干物を背中にかついで、田舎の村を回るようになりました。雪の降る日、バスに乗って村へ行くこうと支度をしていた母に父が言ったのです。

「栄美子を連れていけ。何事が起きるかもしれん。二人の方が安心だそい」

私は六才。雪が消えたら学校に行く年でした。母はまだ小さな私を見て、

「雪の道歩けるかい」

私は「ごくん」と頷いて、魚の干物を背中にかついだ母と一緒にバスにのりました。

雪の道をバスで三十分あまり乗ると、町の二倍も雪の積もった根知村に着きました。バスを降りて雪の道を十分程用心深く歩くと、母の親戚の家でした。

「おやあ、ご苦労だったね。おまんも父ちゃんが弱くなって苦労するね。子供も一緒だねか。寒かったろう」

といいながら炬燵に入れてくれ、その内、連絡してあったのだろう、近所の人が集まってきた、母のかついで来た魚の干物や、煮干し、昆布が飛ぶように売れて、残りはほんの少しになりました。母は、お茶を呼ばれると、もう一軒の親戚に寄ることにしました。近所の人のお茶のみが続く中、

「やあ栄美子、支度して行くよ」

と私を促し、雪の積もった外に出ました。

空は晴れて、薄日が差していました。親戚のおばちゃんも、お茶のみに来ているおばちゃん達もみくんな外に出て、

「雪の道、気を付けてのう。お道よう」

「お道よう」

「お道よう」

手を振って大きな声で送ってくれました。私は母を見上げました。深く礼をする母の目には涙がこぼれていました。

雪の道を三十分も歩いて、もう一軒の親戚の家に来ました。

「おお、雪の道大変だったね。さあ炬燵に入って、あったまんない。おやあ、栄美ちゃんかい。大きくなったね〜」

背中が曲がったおばあちゃんに「さあ、さあ」といわれて、あったかい炬燵に足を入れて、昼飯の握り飯を母と二人で食べ始めると、おばあちゃんは漬物や、あつ〜いみそ汁を「寒かったろうに」といいながら、出してくれました。

私は口いっぱいおにぎりをほおばりながら母という幸せを実感しました。

おばあちゃんの誘いで集まってくれた近所のおばあちゃん達も、母の持ってきた干物や昆布、煮干しをみんな買ってってくれて完売。

最終バスに間に合うように外に出ると、おばあちゃん達も外に出てくれ、

「気を付けてなあ。お道よう」

「お道よう」

声を合わせて送ってくれました。あったかい言葉に、小さな私も、

「ありがとうございました」

と頭を下げ、母も背中をふか〜くごごめて

「ありがとうございました。ありがとうです」と挨拶をすると、

「父ちゃん大事にね。お道よう」

「お道よう」

声をそろえるように大きな声で送ってくれました。

それから私は「お道よう」の相手を思いやるこの挨拶言葉が大好きになりました。

父は半年もすると、元気を取り戻し、母の行商は終わりました。

父は自転車のペダルを懸命に漕いで、魚の行商を八十五歳まで続け、私達子供三人を高校まで行かせてくれました。

「お道よう」の言葉を聞くと、子供の時母といった雪道が思い出され、おばちゃんやおばあちゃんが見送ってくれた情景が目には浮かびます。

時がたち、おばあちゃんになった私は地域の集会所や、公民館に集まって会議や、話し合いが終わり、それぞれの家に帰る時、

「お道よう」

の言葉をかけるように心がけていました。

その内周りの人たちも、

「お道よう」

と声を掛け合うようになり、

「いい言葉だね。昔おじいさんや、おばあさんがよう、言うとした」

「むかしやみんなが使っていたわね」

「そうだね」

と昔を思い出して、「お道よう」の言葉を掛け合うようになってきています。

「根知では今もみんな使っているや」

と親戚のおばあちゃんが話しています。

「帰り道、何事もなく無事お帰り下さる」

というあったかい思いやりのある言葉を私達糸魚川市のみならず、全国の皆さんに使って欲しいと思うのです。

「お道よう」

こんな素敵な言葉を使っていると、人の心が優しくなり、お互いを思いやる心が高まります。そして、あったかい心の交流が始まると思うのです。